



Title	子どもの食事満足度と食品摂取状況および自覚的健康感との関連
Author(s)	橋本, 恵子; 森谷, 潔; 福地, 保馬
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 88, 269-277
Issue Date	2003-02
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.88.269
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28889
Type	departmental bulletin paper
File Information	88_P269-277.pdf



子どもの食事満足度と食品摂取状況および 自覚的健康感との関連

橋 本 恵 子*・森 谷 繁**・福 地 保 馬**

Correlation and Assessment of the Subjective Satisfaction Level of
One's Own Dietary Life by the Frequency of Various Food Intakes and
the Self-evaluated Health Condition among Children

Keiko HASHIMOTO, Kiyoshi MORIYA and Yasuma FUKUCHI

【要旨】子どもが食生活に満足している程度を主観に基づいた「食事満足度」で把握し、今後の食教育の方向性を検討した。小学5、6年生に質問紙調査を行った。「食事がおいしい」「食事が楽しい」「食べることが好き」の3項目で「食事満足度」を構成し、「はい」「どちらともいえない」「いいえ」で回答させ、3-1点を与え各得点を合計して「食事満足度得点(9-3点)」を算出した。食事満足度得点と食品摂取頻度並びに自覚的健康感との関連をスピアマンの順位相関係数で検討した結果、両方に正の相関が認められた。また、対象者を食事満足度得点が9点の「満足している(S)群」と8-3点の「満足しているとはいえない(DS)群」に分けると、S群の子どもが46.4%であり、S群はDS群より食品摂取頻度が高く健康状態がよいと自覚する傾向にあった。子どもが自分の食生活に満足できるという主観的な要素を考慮し工夫した食教育の展開が必要と考える。

【キーワード】子ども、食事満足度、食品摂取頻度、自覚的健康感、食教育

I. 緒言

子どもの食生活の乱れが問題になって久しい。朝食の欠食や一人で食べる食事¹⁾、動物性たんぱく質や脂肪の多量摂取²⁾、カルシウムや鉄などのミネラル不足³⁾等、枚挙にいとまがない。近年、そのような中で食教育の重要性が強調されてきている。

食教育では、食物についての知識(栄養素や調理法など)を得ることや健康を維持するための食生活を営む力を身に付けることが重要と考えられている。他方、楽しく食事することは、消化吸收だけでなく食生活の意義やマナーの向上と関連しており、児童の発達に影響を与えるとの報告⁴⁾もあり、食事を楽しむなどの主観的な満足感を育てる食教育も重要であると思われる。荒記ら⁵⁾によると、「食生活の満足度」は生活状態の主観的な側面を見ることを通して「精神的に良好な状態」を評価する方法である。従って、食生活における満足感を高めることは、

* 北海道大学大学院教育学研究科健康スポーツ科学講座修士課程

** 北海道大学大学院教育学研究科健康スポーツ科学講座教授

QOLを向上させる重要な要素であると考えられる。精神的満足感を得るという心理的側面から食生活を見直すことが必要である⁶⁾と提唱されている。

「食」の満足度に関しては、食の満足感構成要素の構造⁷⁾や「食生活の満足度」で食習慣を評価したもの^{6,8)}、女子大生や高齢者を対象に「食生活満足度」「食事満足度」を研究したものがある⁹⁻¹²⁾。それらによると、満足度が高い人は身体的・精神的に良好な健康状態を維持しており¹⁰⁻¹¹⁾、毎日朝食を摂り、多様な食品を摂取するなど良好な食行動・食習慣であった⁹⁾。しかしながら、子どもの「食」の満足度に関する研究報告は見当たらない。学童期の子どもは食習慣の形成期であり、食生活に対する満足感や心身の健康や生活全般と密接に関わっていると考えられる。ゆえに、子どもが自分の食生活に対して満足しているか否かを検討することは重要であると考えられる。

本研究では、子どもの食事に対する主観的な評価を把握するための指標として「食事満足度」を「おいしい」「楽しい」「好き」という要素から作成し、子どもの食事満足度の現状、並びに食品摂取状況や自覚的健康感との関連を明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1) 調査対象・時期

【対象者】札幌市北区内の公立小学校のうち、「食生活と健康についてのアンケート」調査の依頼に応じた7校に通う5, 6年生児童, 合計1182人

【時 期】2000年9月中旬～10月初旬

2) 調査方法・内容

【調査方法】対象校に人数分の調査票を届け、学級担任を通じて生徒に配布し、児童が直接記入する方法によった。学校で授業中に記入するか、児童が家庭に持ち帰って記入するかは各学校任意とした。無記名とし、個人が封筒に入れ封をして担任を通じて回収した。

【調査内容】アンケートは食生活、体調、生活習慣、回答者の属性の4大項目から構成されたが、その中から①「食事がおいしいか」・「食事が楽しいか」・「食べることが好きか」という質問に対する回答から「食事満足度」を評価し、②12食品の摂食頻度、③体調の良否(12項目の質問)、④属性(学年・性別)を分析の対象にした。

【集計方法・統計処理】回収した調査票は、秀吉 Pro for Windows (SSRI; 社会情報サービス社)を用いて集計し、統計処理はStatcel¹³⁾で行った。

「食事満足度」を求めるために、「食べることが好きか」「食事がおいしいか」「食事が楽しいか」の3つの質問に「はい」「どちらともいえない」「いいえ」で回答させた。「はい」に3点、「どちらともいえない」に2点、「いいえ」に1点を与え、各得点を合計して「食事満足度得点(9-3点)」を算出した。9点の子どもの「満足している群(S群)」, 3-8点の子どもの「満足しているとはいえない群(DS群)」とした。12の食品は白木ら¹⁴⁾が既に報告しているものに従い、1週間での摂取頻度の選択肢を小学生にふさわしいと考えて、「ほぼ毎日」「週3-4日」「週1-2日」「食べなかった」とした。12品目の食品は「(1) 緑黄色野菜」「(2) 淡色野菜」「(3) 果物」「(4) 魚」「(5) 卵」「(6) 肉」「(7) 豆・豆製品」「(8) 牛乳・乳製品」「(9) 海藻類」「(10) いも類」「(11) インスタント食品」「(12) 清涼飲料水」であった。「(1) 緑黄色野菜」

～「(10) いも類」については、摂取頻度の「ほぼ毎日」に4点、「週3～4日」に3点、「週1～2日」に2点、「食べなかった」に1点を与え、多量摂取が問題になる「(11) インスタント食品」「(12) 清涼飲料水」については逆順位の得点を与えた。自覚的健康感は、1週間でよく自覚した体調に対する7項目[(1) めまい・立ちくらみの有無, (2) だるいことがあった, (3) 気持ち悪いことがあった, (4) 排便の頻度, (5) 午前中に眠いことがあった, (6) 夜眠れないことがあった, (7) 朝すっきり目覚めた], 普段からよく自覚している健康状態5項目[(8) 疲れやすい, (9) 風邪を引きやすい, (10) おなかをこわしやすい, (11) いらいらしやすい, (12) アレルギーの有無]をたずねた。回答選択肢について(1)～(3) (5), (6) では、「毎日のようにあった」に1点, 「ときどきあった」に2点, 「まったくなかった」に3点を与え, (4), (7) では逆順位の得点を与えた。(8)～(12) では「はい」に1点, 「いいえ」に3点を与え, 得点が高いほど自覚的健康感が良いものとした。

食事満足度得点と12食品の摂食頻度並びに自覚的健康感(12項目の質問)の間の相関の有無をスピアマンの順位相関係数を用いて検定した。また, 2群と各質問項目をクロス集計し, マン・ホイットニー検定(体調の質問(8)～(12)では 2×2 のため χ^2 検定)を行った。すべて有意水準を5% (両側検定; χ^2 検定では上側検定)とした。

III. 結果

1) 回収率と回答者の内訳

回収率は83.0% (981/1182部), 有効回収率は76.4% (903/1182部)であった。

子どもは, 5年生43.3% (391人), 6年生56.7% (511人)であった(不明1名)。性別は, 男子49.9% (450人), 女子50.1% (452人)とほぼ同数であった(不明1名)。

2) 食事満足度

質問「食べることが好きか」に対する回答をみると, 「はい」56.8%, 「どちらともいえない」40.9%, 「いいえ」2.3% ($n=909$), 「食事がおいしいか」では, 「はい」88.0%, 「どちらともいえない」11.4%, 「いいえ」0.7% ($n=906$), 「食事が楽しいか」では, 「はい」71.3%, 「どちらともいえない」25.4%, 「いいえ」3.3% ($n=905$)であった。「食事満足度得点」によって分けた“S群(9点)”は46.4%, “DS群(3－8点)”は53.6%であった($n=903$)。各得点で見ると8点が29.3%, 7点が15.4%, 6点が6.5%, 5点が1.6%, 4点が0.4%, 3点が0.3%で, 平均値($\pm$ SD)は 8.1 ± 1.1 点であった。以下, 満足度得点を求めることのできた903名を対象として分析した。

3) 食事満足度と食品摂取頻度の関連

3-1) スピアマンの順位相関係数: 食事満足度得点と各食品摂取頻度の得点間の相関を検討した。食事満足度得点と各食品の摂取頻度得点との関係は, 緑黄色野菜(同順位補正相関係数: $rs=0.117$, 同順位補正Z値: $z=3.517$, 同順位補正P値: $p=0.000$; 以下同様), 淡色野菜($rs=0.091$, $z=3.517$, $p=0.007$), 果物($rs=0.091$, $z=2.745$, $p=0.006$), 魚($rs=0.800$, $z=2.390$, $p=0.017$), 卵($rs=0.138$, $z=4.127$, $p=0.000$), 肉($rs=0.139$, $z=4.171$, $p=0.000$), 豆類($rs=0.116$, $z=3.462$, $p=0.001$), 牛乳・乳製品($rs=0.072$, $z=2.151$, $p=0.031$), 海藻

類($rs=0.111$, $z=3.346$, $p=0.001$), いも類($rs=0.148$, $z=4.434$, $p=0.000$), インスタント食品($rs=0.081$, $z=2.413$, $p=0.016$)で, 清涼飲料水以外の項目で正の相関が認められた。3-2) クロス集計(表1): 食品12項目の摂取頻度を“S群”“DS群”でクロス集計しマン・ホイットニー検定を行った結果, 卵, 肉, 豆類, 海藻類, いも類(以上 $p<0.001$), 緑黄色野菜, 魚, 牛乳・乳製品(以上 $p<0.01$), 淡色野菜, 果物, インスタント食品(以上 $p<0.05$)で, S群の摂取頻度がDS群より有意に高い傾向であった。豆類の摂取頻度を典型例として図1に示した。

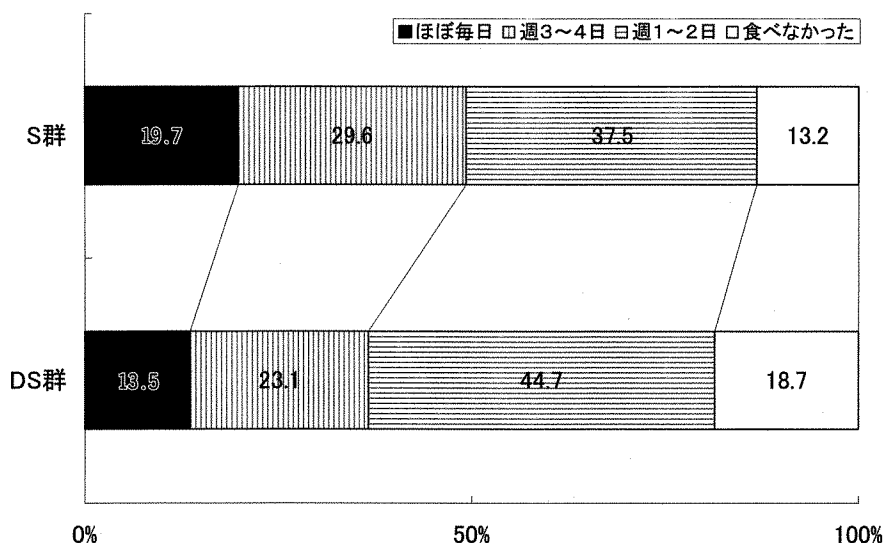


図1 群別でみた食品摂取頻度(例:豆類)

S群;満足している群, DS群;満足しているとはいえない群

4) 食事満足度と自覚的健康感の関連

4-1) スピアマンの順位相関係数: 食事満足度得点と自覚的健康感の得点間の相関を検討した。

「めまい・立ちくらみを感じた(同順位補正相関係数: $rs=0.106$, 同順位補正Z値: $z=3.156$, 同順位補正P値: $p=0.002$)」「だるいことがあった($rs=0.163$, $z=4.860$, $p=0.000$)」「気持ち悪いことがあった($rs=0.116$, $z=3.437$, $p=0.001$)」「午前中に眠いことがあった($rs=0.095$, $z=4.676$, $p=0.000$)」「夜眠れないことがあった($rs=0.157$, $z=4.676$, $p=0.000$)」「朝すっきり目覚めた($rs=0.116$, $z=3.452$, $p=0.001$)」「排便の頻度($rs=0.109$, $z=3.233$, $p=0.001$)」「疲れやすい($rs=0.071$, $z=2.104$, $p=0.035$)」「おなかをこわしやすい($rs=0.083$, $z=2.482$, $p=0.013$)」「いらいらしやすい($rs=0.097$, $z=2.859$, $p=0.004$)」で正の相関が認められた。

4-2) クロス集計(表2): 自覚的健康感12項目を“S群”“DS群”でクロス集計しマン・ホイットニー検定, または χ^2 検定を行った結果, 「だるいことがあった」「気持ち悪いことがあった」「排便の頻度」「夜眠れないことがあった」(以上 $p<0.001$), 「朝すっきり目覚めた」($p<0.01$),

表1 食事満足度によって分類した2群の食品摂取頻度

		(上段：同順位補正Z値, 下段：同順位補正P値)			
質 問	カテゴリー	全体(%)	S群	DS群	マンホイットニ検定
緑黄色野菜	ほぼ毎日 (%)	35.9	41	31.5	Z = 3.065
	週3～4日	31.4	30	32.7	
	週1～2日	28.3	25.9	30.4	
	食べなかった	4.3	3.1	5.4	P = 0.002
	合計 (人)	900	417	483	
淡色野菜	ほぼ毎日 (%)	30.6	34.7	27.1	Z = 2.385
	週3～4日	31.8	30.9	32.7	
	週1～2日	29.6	27.3	31.7	
	食べなかった	7.9	7.2	8.5	P = 0.017
	合計 (人)	898	418	480	
果物	ほぼ毎日 (%)	34.9	39.6	30.8	Z = 2.340
	週3～4日	31.4	29.1	33.3	
	週1～2日	28.4	26	30.4	
	食べなかった	5.3	5.3	5.4	P = 0.019
	合計 (人)	902	419	483	
魚	ほぼ毎日 (%)	13.4	16.5	10.7	Z = 2.630
	週3～4日	31.6	32.5	30.8	
	週1～2日	47.4	44.4	50	
	食べなかった	7.6	6.7	8.5	P = 0.009
	合計 (人)	903	419	484	
卵	ほぼ毎日 (%)	18.4		22.5	14.9
	週3～4日	27.6	29.3	26.2	Z = 3.565
	週1～2日	42.1	38.4	45.2	
	食べなかった	11.9	9.8	13.6	P = 0.000
	合計 (人)	901	417	484	
肉	ほぼ毎日 (%)	18.3	22.2	14.9	Z = 4.194
	週3～4日	40.9	43.4	38.6	
	週1～2日	38.4	33.4	42.8	
	食べなかった	2.4	1	3.7	P = 0.000
	合計 (人)	903	419	484	
豆類	ほぼ毎日 (%)	16.4		19.7	13.5
	週3～4日	26.1	29.6	23.5	Z = 3.904
	週1～2日	41.4	37.5	44.7	
	食べなかった	16.2	13.2	18.7	P = 0.000
	合計 (人)	897	416	481	
牛乳・乳製品	ほぼ毎日 (%)	63.4	68.2	59.3	Z = 2.857
	週3～4日	12.8	11.2	14.2	
	週1～2日	17.4	16.3	18.4	
	食べなかった	6.4	4.3	8.1	P = 0.004
	合計 (人)	897	418	479	
海藻類	ほぼ毎日 (%)	19.5	23.2	16.3	Z = 3.860
	週3～4日	29.8	32.5	27.4	
	週1～2日	39.7	36	42.9	
	食べなかった	11.0	8.4	13.4	P = 0.000
	合計 (人)	897	419	478	
いも類	ほぼ毎日 (%)	12.8	16.7	9.3	Z = 4.125
	週3～4日	33.3	35.2	31.7	
	週1～2日	43.0	40.4	45.2	
	食べなかった	10.9	7.7	13.7	P = 0.000
	合計 (人)	900	418	482	
インスタント食品	ほぼ毎日 (%)	2.9	2.6	3.1	Z = 2.248
	週3～4日	9.6	9.6	9.5	
	週1～2日	52.0	47.6	55.8	
	食べなかった	35.5	40.1	31.5	P = 0.025
	合計 (人)	898	416	482	
清涼飲料水	ほぼ毎日 (%)	28.2	29.5	27	Z = -0.367
	週3～4日	26.1	24.9	27	
	週1～2日	30.4	30	30.8	
	食べなかった	15.4	15.6	15.2	P = 0.714
	合計 (人)	898	417	481	

S群：満足している群, DS群：満足しているとはいえない群

(n=903 各項目ごとに欠損データを除いた)

表2 食事満足度によって分類した2群の自覚的健康感

(上段: 同順位補正Z値, 下段: 同順位補正P値)

質 問	カテゴリー	全体(%)	S群	DS群	マンホイットニ検定
めまい・たちくらみ	毎日あった(%)	4.7	3.6	5.7	Z = 2.413
	ときどきあった	30.8	27.9	33.3	
	なかった	64.5	68.5	61.1	P = 0.016
	合計 (人)	891	416	475	
だるい	毎日あった(%)	7.3	4.4	9.9	Z = 4.472
	ときどきあった	49.9	45.8	53.6	
	なかった	42.7	49.9	36.6	P = 0.000
	合計 (人)	889	413	476	
気持ち悪い	毎日あった(%)	2.7	1.7	3.6	Z = 3.362
	ときどきあった	36.2	31.5	40.3	
	なかった	61.1	66.8	56.2	P = 0.001
	合計 (人)	893	416	477	
排便の有無	毎日あった(%)	40.6	47.3	34.8	Z = -3.835
	2日に1回	33.1	30.7	35.2	
	ない日が多かった	26.3	22	30	P = 0.000
	合計 (人)	876	410	466	
眠い	毎日あった(%)	22.4	20.6	23.9	Z = 2.537
	ときどきあった	53.0	50.4	55.3	
	なかった	24.6	29.1	20.8	P = 0.011
	合計 (人)	890	413	477	
眠れない	毎日あった(%)	8.9	7	10.5	Z = 4.083
	ときどきあった	35.3	29.9	40	
	なかった	55.8	63.1	49.5	P = 0.000
	合計 (人)	890	415	475	
目覚めすっきり	毎日そう(%)	16.8	18.3	15.6	Z = -2.680
	ときどきそう	45.9	49.5	42.7	
	そうでないことが多かった	37.3	32.2	41.7	P = 0.007
	合計 (人)	891	416	475	
χ^2 検定					
疲れやすい	はい(%)	46.0	42.8	48.7	$\chi^2 = 3.165$
	いいえ	54.0	57.2	51.3	P = 0.075
	合計 (人)	892	416	476	
風邪をひきやすい	はい(%)	17.6	15.1	19.7	$\chi^2 = 3.244$
	いいえ	82.4	84.9	80.3	P = 0.072
	合計 (人)	892	416	476	
おなかをこわしやすい	はい(%)	31.1	27.4	34.4	$\chi^2 = 5.046$
	いいえ	68.9	72.6	65.6	P = 0.025
	合計 (人)	893	416	477	
いらいらしやすい	はい(%)	49.1	44.9	52.9	$\chi^2 = 5.574$
	いいえ	50.9	55.1	47.1	P = 0.018
	合計 (人)	879	414	465	
アレルギーの有無	はい(%)	9.0	9.7	8.5	$\chi^2 = 0.342$
	いいえ	91.0	90.3	91.5	P = 0.559
	合計 (人)	851	393	458	

S群: 満足している群, DS群: 満足しているとはいえない群

(n=903 各項目ごとに欠損データを除いた)

「めまい・立ちくらみを感じた」「午前中に眠いことがあった」「おなかをこわしやすい」「いらいらしやすい」(以上 $p<0.05$)であった。「だるいことがあった」の頻度を典型例として図2に示した。

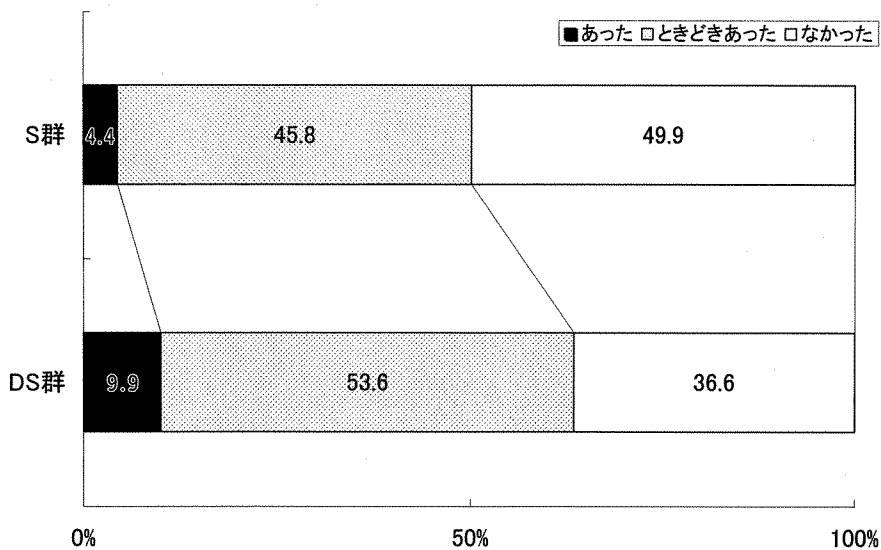


図2 群別でみた自覚的健康感 (例：だるい)

S群；満足している群，DS群；満足しているとはいえない群

IV. 考察

子どもが食事にどの程度満足しているかを把握するための指標として「食事満足度」を用い、子どもの食事満足度と食品摂取頻度並びに自覚的健康感との関連を検討した。

食事満足度得点の平均は8.1点と高く、約半数の子どもが9点で食事に満足していたが、残りの半数の子どもは食事に対して何らかの要因で満足していなかった。また、食事満足度と食品摂取頻度得点、自覚的健康感の項目得点の多くで有意な正の相関があったことから、食事に対する満足感が高い子どもはいろいろな食品を食べ(但し「インスタント食品」は食べていない)、健康状態がよいと自覚していることがうかがえた。

満足度を構成する質問別にみると、「食事をおいしい」と感じている子どもは88.0%で、「食事を楽しい(71.3%)」「食べることが好き(56.8%)」と感じている子どもよりも多かった。食事の「おいしさ」は、食べることについての感覚として評価しやすかった可能性が推察される。「食べることが好きか」の質問は抽象的であるためか「どちらともいえない」「いいえ」をあわせた回答が約4割と、他の2項目に比べて多かった。「食べる」という行為が日常当たり前すぎることで、あえて「好きかどうか」と意識することがないのかもしれない。「食事が楽しいか」の質問に3.3%と少数ではあるが「いいえ」と答えた、食事を「楽しいもの」として捉えていな

い子どもがいたことも注目される。

食と健康が密接な関係にあることは周知の事実である。食事が「おいしい」「楽しい」「好き」と感じることで「食事満足度」を構成していることから、そのような主観的な感覚から得られる精神的な満足感が健康状態をよいと自覚することにより何らかの影響を及ぼしていると推察される。健康に良いといわれる食品を摂り栄養を満たすことは大切であるが、それと同時に、食べること自体をポジティブに捉える主観的な要素にも注目していくべきである。例えば、食べることが好きであれば自分が食べる食品については関心を持つにちがいない。食べ物に対する関心は、食事への関心へ、食べるときの状況（例えばマナーや雰囲気）、食材や調理のこと、食と健康との関わりやその食材ができるまでの過程（例えば農水産業）などに対する関心につながっていくと考えられる。この年代の子どもたちは食べることを以外に関心の向くことが多いにしろ、食は「生きること」の基本である。子どもの頃から「食べることを意識することは、将来にわたって健康な生活を送るために大切な要素である」と考える。子どもが自分に関わる「食」—すなわち食物、食生活、食行動、食事の意義、食文化等—に関心を持つために、子どもが自分の食生活に満足できるという主観的な要素（食事がおいしい・楽しい・好き）を考慮した、食教育の展開が必要と考える。

V. 結語

子どもの食事に対する主観的な評価を把握するための指標として「食事満足度」を用い、子どもの食事満足度と食品摂取頻度、自覚的健康感との関連を検討した。

1. 食事に満足している子どもは約半数とみなされた。
2. 食事満足度が高い子どもは、満足度が低い子供に比べ多くの食品を摂取しており、健康状態が良いと自覚している傾向にあった。
3. 今後の食教育において、食事をおいしい・楽しいと感じることができるとの主観を大事にし、食に関心を持てるような授業展開が大切であることが示唆された。

VI. 謝辞

本調査を行うにあたって、アンケートの依頼を快くお引き受けいただいた小学校の教職員と児童の皆様、ならびに佐美靖先生のご助力・ご助言に心より感謝致します。

文献

- 1) 食べもの文化編集委員会. データランド. 食べもの文化 1998; 248: 4-5.
- 2) 根岸宏邦. 子どもの食事: 中公新書, 2000: 228-230.
- 3) 坂本元子. 食が担う心身の健康. 小児保健研究 1999; 58: 659-664.
- 4) 畑中高子, 生田清美子, 竹田由美子. 小学生の食生活と健康教育. 学校保健研究 1999; 41: 415-428.
- 5) 荒記俊一, 村田勝敬, 八隅祥子, 他. 健康を中心とした生活内容の満足度と重視度の構造解析—“健康づくり推進事業”地域の婦人を対象として—. 日本公衆衛生雑誌 1984; 31: 207-215.
- 6) 横塚昌子, 渡辺満利子. 「食事パターン」・「食生活の満足度」による食物摂取構造評価の有用性—女子学生を対象—. 学苑 1991; 620: 27-37.
- 7) 田辺由紀, 金子佳代子. 食の満足感構成要素の構造. 日本家政学会誌 1998; 49: 1003-1010.

- 8) 渡辺満利子, 横塚昌子. 「食生活の満足度」による食習慣の評価. 学苑 1990; 607: 34-40.
- 9) 足立蓉子. 女子学生の食生活満足度に及ぼす要因. 日本家政学会誌 1990; 41: 303-311.
- 10) 足立蓉子. 高齢者における食事満足度に及ぼす要因. 栄養学雑誌 1988; 46: 273-287.
- 11) 足立蓉子. 高齢者の食事満足度に及ぼす要因 (第2報). 日本家政学会誌 1991; 42: 529-536.
- 12) 足立蓉子. 高齢者の食事満足度に及ぼす要因 (第3報). 山口女子大学研究報告 1991; 17: 23-31.
- 13) 柳井久江. 4 step エクセル統計. 東京: 星雲社, 1998: 207-241.
- 14) 白木まさ子, 深谷奈穂美. 小学生の食生活状態と自覚症状について. 栄養学雑誌 1993; 51: 11-21.

【Abstract】 The subjective satisfaction level of one's own dietary life (SLD) among children was investigated using questionnaires. The subjects were 1182 children from the 5th or the 6th grade of elementary school. The SLD questionnaires consisted of three components, i.e., (1) Does your meal taste good? (2) Do you enjoy taking a meal? (3) Do you like eating? They answered "yes," "no" or "neither" to all questions, and each answer was scored from 3 to 1 point in order. The highest SLD score was 9, and the lowest was 3. SLD scores were analyzed to correlate with the frequency scores of various food intakes (FFI) and of the self-evaluated health condition (SHC) by Spearman's correlation coefficient by rank test. From the results, SLD scores correlated positively to both FFI and SHC scores. They were divided into 2 groups by SLD scores; 9 points: the satisfied (S) group, and 8-3 points: the not satisfied (DS) group. The S-group accounted for 46.6 percent of all, but more than half of the children were dissatisfied with their dietary lives in some respect. The S-group points were higher in FFI and SHC than those of the DS-group. Therefore, dietary education is important, considering the subjective factors of children.

【Key word】 children, subjective satisfaction level of dietary life, food intake frequency, self-evaluated health condition, dietary education